




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 3064 号	氏名	田中 侑哉
審査担当者	主査	川口 巧	(印) 
	副主査	平岡 弘二	(印) 
	副主査	石橋 生哉	(印) 
主論文題目: Impact of Skeletal Muscle Mass Reduction on Long-term Survival After Radical Resection of Gastric Cancer (胃癌術後骨格筋減少の長期予後への影響)			

審査結果の要旨 (意見)

本論文は、胃癌根治術後患者の骨格筋量が予後におよぼす影響を検討したものである。胃癌根治手術を受けた115名を対象に、CTを用いて術前筋肉量指数(SMI)と術後筋肉量の変化を評価している。解析の結果、術前SMI低値だけでなく、術後骨格筋量の減少も全生存率の独立危険因子であることが明らかとなった。また、術前SMIが保たれていても、術後骨格筋量が減少することで予後不良となることも明らかとなった。さらに、術後骨格筋量の減少には、手術時間(440分以上)と術式(胃全摘)が関与することも明らかになった。本研究は、術前・術後の骨格筋量に着目した独創的な研究である。本研究により、胃癌患者の予後改善のためには、術前の骨格筋量を基に術式を検討すること重要性や、術後骨格筋量の減少予防に対する取り組みの重要性が示された。本論文は、胃癌患者の予後改善に貢献しうるものであり、学位に値するものである。

論文要旨

本研究は術前の骨格筋量に加えて、術後一年目の骨格筋減少量が胃癌術後長期予後に与える影響に関して検討を行った。150人の根治胃癌切除を行なった患者を対象とした。術前、術後1年目のCTからSkeletal muscle index (SMI)を算出し、さらに術後骨格筋減少率(MR)を計測した。これらのSMI、MRは共に、Overall survival(OS)に関する多変量解析で独立した予後因子であったため、A群:低SMI/高MR、B群:低SMI/低MR、C群:高SMI/高MR、D群:高SMI/低MRに分類し、長期予後及びMRにかかわる因子を検討した。4群間のOSの比較では、A、B、C、D群の順に予後不良であった。さらに4群を含めた多変量解析でも、4群変数はOSに関する独立予後因子であった($P < 0.01$)。MRに関与する因子の決定木分析では、手術時間 >430 分、術式(胃全摘)の順に分岐し、手術因子の関与を強かった。胃癌において術前低骨格筋量に加えて、術後の骨格筋減少率も予後不良因子であった。長期予後改善のために、手術時間短縮や低侵襲な術式の選択が必要な可能性を考えた。